

山口発、病院DXの「理想形」 複数の医療・介護事業を 一元化する ダッシュボードが叶える 「超高速CAPD経営」



医療法人社団水生会 柴田病院 理事長 **柴田 三大氏**

導入前の課題

- データ突合に発生する、膨大な手入力業務
- 複数施設の経営状況の一元管理が難しい

導入後の期待

- 手入力業務の削減
- 複数施設を一元管理するダッシュボードによる迅速な意思決定
- 「全体最適」と「超高速CAPDサイクル」の実現



1946年より山口県山口市で地域住民の健康を支え続けてきた医療法人社団水生会の柴田病院。介護施設や有料老人ホーム、訪問リハビリテーションなどを運営し、医療と介護の連携に注力する同院は今、本格的な病院DXに着手。「自分たちが業界の先駆者になる」と語るのは、商社出身という経歴を持つ理事長の柴田三大さん。地方病院がいかにして最新の病院DXモデルを構築しようとしているのか、freee導入の経緯と、今後のビジョンについてお話を伺いました。

柴田病院が目指した六面体のDX

今回、freeeへの全面切り替えを決定された動機についてお聞かせください。

柴田 三大さん(以下、柴田)： freeeを導入することで、病院DXの「理想の六面体」が描けたからです。「理想の六面体」とは、「うまい、はやい、安い」と「にこ(スマイル)」、そして「局所最適」と「全体最適」の全六面を指します。「うまい」は、セキュリティの高さとAPI連携をはじめとした質の高さです。事務スタッフのレベルがシステムの方で底上げされ、業務の

標準化が進みます。「はやい」は、日々の業務と教育両面のスピード化です。連携による効率化に加え、標準化によって担当者変更時の引き継ぎも早まります。そして「安い」。クラウドサービスはオンプレミス型(自社運用)に比べ安価であり、教育コストも抑えられます。これらを実現しながら、システムの力によって現場とバックオフィスとの部署間衝突(コンフリクト)が少なくなれば、スタッフからにこっと、スマイルが溢れます。そして、局所的にはバックオフィスの部分最適であり、大局的には経営層の迅速な意思決定を含めた全体最適です。全六面に課題を感じていた私にとって、その解決策がfreeeでした。

どのようにDX化を進めていかれる予定でしょうか。

柴田： クラウドネイティブの電子カルテと介護請求システムを導入し、支出管理であるfreeeのデータを手入力なしで連携させる仕組みを考えています。収支を一元管理することで、経営指標や財務計画、AIを活用した行動計画の策定までを素早く実行する狙いです。

freeeに決めた理由として、機能面でよかった点はありますか？

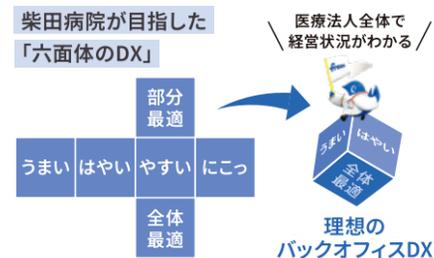
柴田： やはりデータの扱いやすさです。これまでのソフトに強い不満があったわけではありませんが、業務改善における客観的優位性はfreeeが高いと判断しました。

今回は「シングルソース」での情報管理を目指し、会計だけでなく人事労務も同時にfreeeへ切り替えます。今期は現行システムと並行運用し、来期から完全移行する予定です。タイミングよく、freeeが医療法人会計に対応予定と伺ったことも決め手でした。複数の医療・介護事業による複雑な会計に寄り添い、DXの基盤となってくれる点は非常に心強いです。

ルービックキューブで見据える「全体最適」

なぜ六面体を目指したのですか？

柴田： ルービックキューブは正面の三面が綺麗に揃っていても、裏側が揃っていないことがよくあります。経営ですべてのピースを揃えるのは難しいですが、今回のシステム導入に関しては、どこから見ても綺麗な「六面体」をイメージすることができました。局所的な「虫の目」、大局的な「鳥の目」、時代の流れを読む「魚の目」をルービックキューブに



投影し、部分最適に陥りがちな医療界の現状を打破して、全体最適を目指します。

現場の使い勝手と経営判断のバランスについてはどうお考えですか？

柴田： 紙から電子カルテへの移行に比べ、オンプレミスからクラウドへの移行は、現場にとって使い慣れたシステムを離れるストレスがあるかもしれません。しかし、現状はデータの突合に膨大な手作業が発生しています。組織全体で見れば、管理部門のコストとスピードの改善は不可欠です。最終的な意思決定は、「全体最適を叶えるために、今切り替えるべきかどうか」という視点で行いました。

クラウドの「型」に合わせる合理性。前例がないなら先駆者になればいい

あえてクラウドサービスの「型」に合わせる決断をされたのはなぜですか？

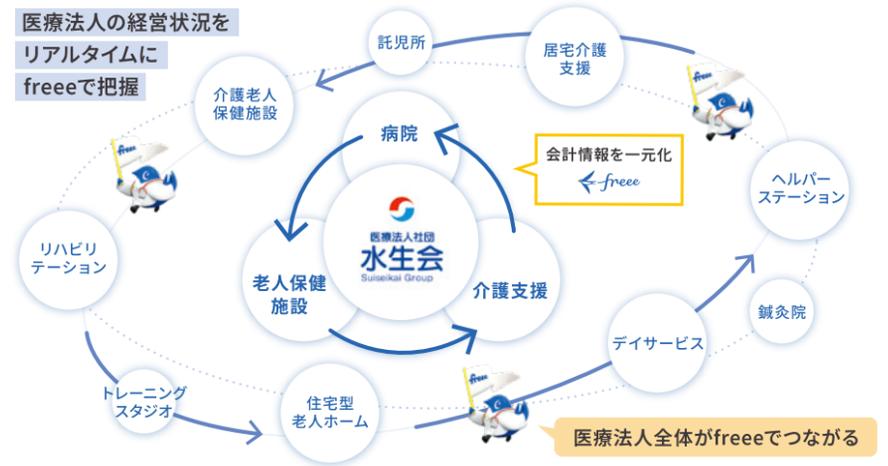
柴田： かつてはカスタマイズが必要だったことも、今はクラウドで十分に実現できます。また、アップデートにより日々機能が進化するという将来的な価値を享受できるのもクラウドの良さです。

導入にあたり参考にしたケースはありましたか？

柴田： かなりリサーチしましたが、そのまま真似できる理想のモデルは存在しません。自社でシステム会社を作ってしまうような異次元の事例もありましたが、それはハードルが高い。ならば「自分たちが先駆者になろう」と。私たちは既存の優れたサービスを繋ぎ合わせることで、最適なシステム環境を作ろうと考えました。

トップダウンで「一石を投じる」。現場との対話で探る「最善の次策」

導入における現場とのコミュニケーションについて教えてください。



柴田： まずは未来のために必要なことだということトップが「一石を投じる」ことだと思います。しかし、現場からは十中八九、波紋が生じます。その声を尊重しつつ、最終的には「価格・将来性・安全性」を軸に決断を下します。このトップダウンとフォローアップのバランスが重要です。その際、「最善の次策(中間の理想)」という考え方を大切にしています。理想が15でも現場の許容が8なら、間を取って10で着地させる。自分の理想(マキマム)を押し通すのではなく、現場の反応を見てアジャストし、とにかく前に進む。進むことで次の景色が見えてくるはずですよ。

「超高速CAPD」で医療介護業界のモデルとなる

DXによって解決したい経営課題を教えてください。

柴田： 病院経営は一般企業と異なり、病床数や診療報酬に制限があります。厚労省の基準を遵守しつつ、削減可能なバックオフィス業務などは徹底的に効率化します。一方で、自由度のある自費サービスや、制限の少ない訪問診療・外来機能を強化して収益を

上げ、投資に回していきたいと考えています。

実態を解像度高く把握する「一元化されたダッシュボード」が必要なのですね。

柴田： その通りです。売上だけでなく、「なぜその数字になったのか」というKPIと会計数字が同時に、素早く出る環境を叶えたい。現在、当院は病院のほかに複数の介護施設を運営していますが、freeeなら各施設を「部門」として管理でき、法人全体と施設ごとの数字を瞬時に切り替えられます。全体を俯瞰しつつ、即座に詳細を深掘りできるダッシュボードは、舵取りの難しい医療経営の羅針盤になります。

最後に、今後のビジョンを教えてください。

柴田： 現場の担当者も今は「やるしかない」と覚悟が決まっています。本格導入後は、freeeを軸に据えたチェックからはじまる「超高速CAPD(Check, Action, Plan, Do)サイクル」の実現を目指します。freeeさんには、そのための支援をお願いしたいですし、こちらからも現場のアイデアを提案していきたい。当院の取り組みが、厳しい医療介護業界全体のモデルになれば幸いです。

医療法人の黒字を叶える

『freee for 医療』、始動。監修：税理士法人 日本経営

クラウドソフト初の医療専用パッケージ『freee for 医療』をリリース。freeeは、すべての医療法人の経営に寄り添います。

『freee for 医療』にできること

- 病院会計準則・老健準則・訪看準則などの医療法人会計をすべてカバー
- 複数施設の会計処理を一元化
- 提出先や様式ごとにワンクリックでレポート作成

フリー株式会社 〒141-0032 東京都品川区大崎1丁目2-2 アートヴィレッジ大崎セントラルタワー21階

